京 濱 支 部 報 よ り

（7 月 15 日付 第 46 号 抜粋）

京浜支部は、馬城会の支部で唯一、支部報を定期的に発行しています。内容も記事や、会員の投稿や動向、通信、事務局だより、物故者そして広告まで、多岐にわたり充実、読み応えがあります。

その一部の記事を、コピー、編集して転載します。

充実の総会！若い会員の積極的参加を望む！
令和元年度京浜支部総会開催

馬城会京浜支部の令和元年度総会は10月15日（火）午後6時から東京・内幸町の日本プレスセンターで開かれました。支部会員30人の参加があり、本部からは奥村前会長、村山新会長、今野事務局長、また旧相馬女子高OGとして2名の出席をいただきました。

最初に荒安明支部長（高18）の挨拶があり、長年に亘る会員の支援に対する謝意と今後の母校及び馬城会への協力のお願いがありました。

次に、本部前会長の奥村晃三氏（高6）からこれまでの6年間の会長職に対する協力と支援に対する謝意があり、続いて本部新会長の村山正之氏（高13）から今後も変わらぬ支援と協力のお願い及び母校、本部と京浜支部の発展を祈念されました。

来賓の紹介で、今野直樹本部事務局長から、母校の進学・部活の現状報告、また東日本大震災のその後の故郷相馬の復興状況、常磐自動車道、JR常磐線復旧についての報告、さらに平成30年に挙行された母校120周年記念行事の報告がありました。

例年のように、生前活躍された多くの先輩・同窓生の物故者に対し、謹んで黙祷を捧げました。

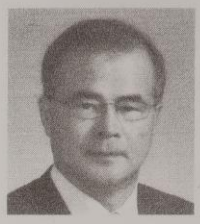
議事に入り、長堀守弘氏（高4）が議長に選出され、事務局から庶務・会計報告があり、監事の森洋一氏（高22）から会計監査の結果が報告され、いずれも全会一致で承認されました。

懇親会は作山忠氏（高3）の乾杯の発声で始まり、本日の特別企画である講談師、一龍斎貞花氏の特別講演『名月会津若松城』が披露されました。貞花氏は講談協会常任理事であり、テレビ出演、数々のDVDや著書の出版でも著名であり、師の弁舌爽やかな独特な語り口に一同耳を奪われ、時代は一気にさかのぼり会津若松城を彷彿とするひと時を過ごしました。

そして一年振りに秋の夜長を先輩後輩が幾重もの輪を作りつつ酒杯を交しながら思い出話に花を咲かせました。

最後はいつものように、《#～馬陵の城の名に負える～》の母校校歌を高らかに斉唱し、いつの間にか夜も更けた霞が関・日比谷公園に別れを告げ、再会を約して散会しました。

「外出自粛」にアスレチック



馬城会京浜支部長　荒 安明（高18）

馬城会京浜支部の皆様におかれましては、日頃よりひとかたならぬご教導ご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年の拙文では母校の入学式の状況をご報告いたしましたが、今年度はコロナ禍により少数で行われたため大変残念ながら参列することができませんでした。つきまして今回は「外出自粛」にもってこいの私流アスレチックをご紹介いたします。

それは、NHK・Eテレで朝6時25分から10分間毎日放送されている「テレビ体操」の活用です。

私が現役の頃から30年以上続けている体操で、ビデオに10種類位撮り、年金生活に入ってからは1日30分から多い時に90分やっております。私が思うに、身体の血流を良くするために大変合理的な体操だと考えております。私の場合、最も問題の脳への血の巡りには効果抜群であると信じて続けている次第です。テレビの前であれば場所も服装も不問、しかも無料です。

ご興味のある方は是非トライしてみて下さい。

最後になりますが、「ここらで止めてもいいコロナ！」会員の皆様の更なるご健勝ご活躍を祈念いたします。

第6回旧相馬女子高同窓会との交流会 艶やかに開催

櫻岡 治（理4）

令和元年11月10日、お茶の水・東京ガーデンパレスにて旧相馬女子高同窓会東京支部との合同同総会が開かれました。

今年は第6回となり、42名の参加がありました。相馬からは台風19号の爪痕生々しい中にもかかわらず、相馬東高校同窓会副会長反畑順子氏に来賓としてご出席いただきました。

荒安明京浜支部長の挨拶の後、馬城会前会長奥村晃三氏の6年間の会長としての重責と思い出、両校へのエールがあり、続いて反畑順子氏の故郷相馬の台風19号による浸水の窮状についての克明な説明に一同息を飲みました。

そして佐藤良平氏（高3）による乾杯にて会食、歓談となり各テーブルで青春時代の思い出話で盛り上がりました。

今年も前年に引き続き国民的演歌歌手北島三郎事務所所属の佐藤久雄氏（高20）からの記念品の寄贈があり、CDやリゾート宿泊券引換券の抽選を行い、大盛況でした。

アトラクションは、まず両校校歌の斉唱から始まり、続いて、みんなで踊ろう！「相馬盆踊り」では全員参加で会場狭しとばかりに故郷を懐かしみながら輪になって踊りました。

更に続いて、みんなで歌おう！では「ふるさと相馬」「花は咲く」の各曲を全員で歌い、アルコールで潤った美声？が会場に響き渡りました。

このように故郷相馬と高校時代を懐かしみながら交流会は盛会のうちにお開きとなり、相馬女子高同窓会東京支部長志田原節子氏が閉会の辞を述べられ、次回を楽しみに散会となりました。

相馬大学はどうなった！

渡部 行（高1）

昨年、遺言を書いたつもりだったが「ご存命なので今年も～」という要請なので最後の雑文を――

戦前、相馬中学は表門のほかに馬陵城口に裏門があった。そこにも立派な表札があり、「福島県立相馬中学校」と書かれていた。しかし、いつの間にか中学が墨で「大学」になっていた。

先生も生徒も知っていたが、ニヤニヤ笑って誰も消さなかった。大学はともかく、先生も生徒も相馬中学に誇りを持ち、世間も認めるエリートだった。先生のなかには旧制第一高校―東大卒もおられ、しごかれた。

女子は県立相馬高等女学校だった。当時としては珍しく近々にあり、女学生は「パンク」、中学生は「カラス」とお互いに悪口をいいながら敬愛し合っていた。

しかし当時は恋愛禁止で、ラブレターが見つかると停学、それ以上の関係になると双方とも退学処分になった。

木造一階建ての校舎の下を歩いていると、各教室の窓に下級生達が集り「おーい雑巾ぼうし来たぞ」とはやしたてる。誰のことかと見上げると、どうやら私のことらしい。それは兄のお下がりで上の部分は全部破れ、これを何回も修理しミシンをかけ、厚さは1センチほどになっていた。それでも雑巾とはね。これは卒業まで使用した。

何故かその後、同窓会などで「とにかく行先輩は怖かった」といわれ「オレは不良仲間ではなかったし、やさしかったと思うがなぁ」といったのだが――。

男女共学で自由、豊かな社会、高校生も全入の時代になった。それにしても相中1回生は東大に8人、私達の同級生は東北大に26人進学した。やはり現状はさびしいと思う。

自由な会、楽しい、美味しい、21回目のオープン相馬会！

佐藤 良平（高3）

第21回の「オープン相馬会」は、令和元年7月15日の「海の日」に、目黒雅叙園にて開催されました。

この会は、高2～5回卒のメンバーを中心に、母校相馬高校出身の人なら先輩後輩を問わずどなたでも参加できるオープンな会として発足しました。

毎年「海の日」に、当初は真夏の会らしくビアガーデン・ライオンで開催するのが決まりでしたが、ここ数年は目黒雅叙園が好評につき同所での開催となっています。

今回は、フランス芸術文化勲章を叙勲された長堀守弘氏（高6）へ華道家鈴木宮子氏（高3）特製のお祝いの花束が贈られ、改めて長堀氏の功績の偉大さを実感しました。

料理のフルコースに参加者が舌鼓を打ちながら、オープンの名の通り席を移動しながら故郷相馬の思い出話や先輩後輩同級生の話に花が咲きました。

今年は新型コロナウイルス感染の影響で中止が決定し残念、また次回の再開を祈念します。

旧制相馬中学校について

昭和21年4月入学生

長堀 守弘（高4）

私は今年米寿88才を迎える。年老いたなぁと、自分でも思うようになった。

昭和8年生まれの酉年は、不思議なことだが制度変更と関係が深い。小学校最後、2年生から国民学校に変わり、中学は旧制最後。中学2年のときに制度変更となり、新制中学校が発足した。そういうことで中～高6年間の間、最下級生は4年間継続されたのである。

貴重な体験といえばそうであるが、イレギュラーであったことは間違いないであろう。旧制中学校は5年間であり、現在の中学3年、高校3年では意見別れるが、それぞれが短期過ぎないかと私は思う。

学校教育で大切なことは、教師と生徒の関係もそうであるが、友人同志の関係は特に、生涯に亘るものでもある。私の場合、間もなく70年になろうとしている。年1回だけではあるが、同期の黒沢達君が世話人で「鹿狼会」を毎年12月に開催している。「俺」「お前」と双方遠慮という垣根を越えて、少年時代の話題に花が咲く。

いいものである。

春高バレー応援雑感

国友 研一（高15）

鹿島の西一信君から春高バレーの応援に行こうと誘われた。「久し振りで東京の同級生と呑めるな」と二ツ返事で承諾。誠に不謹慎な動機であった。

毎年1月5日から東京で開催される春高バレーの全国大会に、相高は見事2年振り21回目の福島県代表となった。県大会優勝では部員8名での快挙に話題となり、スポーツ紙の東北版にも大々的に報道された。

長い間、オリンピック選手も輩出した伝統ある相高バレー部の名声を引き継いでいる選手諸君と指導者の方々に心より敬意と祝意を表したい。

相高は2回戦からの出場で優勝候補の東京代表駿台学園との対戦、相馬からバス5台の大応援団で上京。次年度以降部員不足が懸念されるなか大勢の中学生バレー部員の姿を見て一応一安心。メインの応援団は2年前の大会で「ベスト応援団賞」を受賞した相馬太鼓持参の在校生である。私も会場入りする前より興奮気味。前の試合が長引いたせいか席に着くまもなく校歌斉唱。試合開始となる。試合終了まで全員総立ちでの応援合戦で胸が熱くなり自然と涙が出てくる。この気持ちは会場にいないと絶対に味わえない感覚だろう。

結果は普段の力が発揮出来なかったか、番狂わせにはならなかったが、私は清々しく爽やかな気持ちで敗戦を受けとめた。選手との対面が出来ず賛辞を贈ることが出来ず残念ではあったが、選手には猛練習で勝ちとった県優勝の自信に優るものはなく熱くエールを贈りたい。これから社会人として生きてゆく大きな糧を得たのだから。一方多くの一般の応援のなかにバレー部のOBの方なのか、90を越える方が元気で応援する姿を見つけてびっくり。相馬を離れていても、いつも相高を愛し相馬を想う人がいるかと又、感激。

試合終了後、同級生8名は旧交を温める場所を調布に移し、盃を交わしながら、近況報告や体調管理、相高時代の思い出を楽しく語りあった。名残惜しくも次回の応援と「喜寿の集い」での再会を約し思い出に残る一日を終えた。春高バレーに大感謝！

その他の主な執筆記事の見出しは、

『苦難を乗り越えてその先へ』　馬城会長　村山正之（高 13）
『相馬高校２年目の春に想う』　相馬高等学校長　菊田勇雄
『戦わんかな時至る』　相馬市長　立谷秀清
『人々の安寧を願い伝統の火を灯す』　南相馬市長　門馬和夫
『コロナも目に見れば怖くない？』　原　猛也（高 23）

などがありました。

（８月４日 転載&文責 村山）